

第11章 ラウ（メ）とサウ（へ）

[本章の要旨]

- 中世後期に見られる、推量の助動詞ラウの已然形ラウメと、丁寧の助動詞サウの已然形・命令形サウへの語形につき、その語形の成因を、
 - 語形を縮約させつつ無変化助動詞化しようとする動き
 - と、それに抵抗する
 - 活用形の指標としての活用語尾保存の欲求
- という二つの相反する力の矛盾的統一として解釈を試みる。

第1節 ラウの已然形ラウメ

1-1 《ゆれ》の実態

助動詞ラウは、言うまでもなく中古の助動詞ラムの移り変わった姿であり、中世に現れ近世に入るとやがて衰滅してしまう助動詞である。しかし、中世の末期においても、ラウの使用は、抄物、キリシタン資料、狂言など、口語的性格の強い文献資料に広く認められ、使用頻度も高く、特に、係助詞を文中に置いた文の文末に多用される推量表現形式であることが知られている（村上1979）。

このラウが係助詞コソの結びとなる場合、次の例のように、ラウとラウメの二つの形が現れる。

〈ラウ〉

- ・俊寛といふ文字もんじはなかつたによつて、礼紙れいしにこそあるらうと言うて、…
(天草版平家物語 p. 73)
- ・さぞわか(若)うなりたうこそおじゃるらふ
(虎明本狂言 やくすい)
- ・桃云…チツトヲチクホイヤウナル処テ焚テコソアルラウソ
(三体詩幻雲抄 第5冊 抄物大系 p. 512)
- ・醜ハ飲ム也ノムトコソヨムラウイラヌ字ナリ (玉塵抄 第6冊 抄物大系(2)p. 47)

〈ラウメ〉

- ・続翠云…今ハ面白テ聞ク鳥モ今ハ面白テ見ル花モ別後ハ独コソ見ウスラウメ
(三体詩幻雲抄 第3冊 抄物大系 p. 325)
 - ・史漢ノ書ニ此ノヤウニアルコトハヲボエヌソサモコソアルラウメソ
(玉塵抄 第17冊 抄物大系(4) p. 261)
 - ・許ハ賜天子書ヲ事コソアルラウメ (杜詩続翠抄 4 続抄物資料集成(1)p. 315)
 - ・空劫外ト云ハ空劫已前デコソ在ルラウメ (足利本人天眼目抄 中 抄物大系p. 69)
- もちろん、ランやラメも抄物などには見られるが、キリシタン資料での状況（エソボ物語にはラン・ラメは見られず、平家物語ではランの用例6例全てが和歌中の用例である）

から、ラン・ラメは、音声言語のラウに対して既に古語となっていたものと見なしてよいであろう。したがって、ここではラウと（古語のラメとは形が異なる“新しい”形）ラウメとの《ゆれ》に限って考えることとする。

上のことは、ラウメの形が音声言語として中世後期に普通に話されていたと直ちに主張するものではない。ラウメは、キリシタン資料や狂言には見られず、抄物でも限られた資料にしか出てこない。したがって、あるいは、講義調の口頭でのみ使われたか、抄物での特異な書記言語であったかもしれない。また、ラウメの見られる資料でも、いずれも（コソの結びには）ラウの形の方が使用数は優勢である。ただし、一文献内部で、ラウの形が使われる部分とラウメが使われる部分に明確な文体上ないし位相上の差異は認められず、本章の論旨にとっては、ラウメが実際口頭にのぼせられたものかどうかは、とりあえずどちらでもよいことである。

1-2 〈コソ…已然形〉係り結びの状況

このラウ～ラウメの《ゆれ》は、ラウの已然形の語形の《ゆれ》というよりも、コソに対する結びが、終止連体形と已然形とでゆれているのだと見る方が適切かもしれない。

コソに対する本来の已然形の結びが法則として緩んでしまっているという事実は、何もラウだけでなく広く他の活用語が結びとなる場合にも、中世末期においては、見られる現象である。なかでもラウは、他の語に比してコソの結びに終止連体形をとる率がとびぬけて高い（湯沢1929、村上1979）。^(注1)

係り結びは、その構文論的本質が何であれ、形態の上からは、一文の終末が、連体形または已然形という通常とは異なる形態をとるところにその特質がある。ところが、終止形連体形の合流により、ゾ・ナム・ヤ・カ_レの結びとしての連体形終止は、その特異性を失い、形態の上からは係り結びが見えなくなってしまう。そして中世末期に至るまでに、形態上の特質を持った係り結びは、〈コソ…已然形〉の係り結び一本に限られてしまい、なお命脈を保つとはいうものの、その孤立化はいかんともしがたく、既に形態上の呼応を失う場合もまま見られる、といった状況となったのである。

ラウとラウメの《ゆれ》も、この〈コソ…已然形〉係り結びの《ゆれ》の一環であるから、ラウメも、次の例のように、コソではなくゾの結びに現れてみたり、係りそのものがないのに文末に現れるようなこともある。

- ・五月ノ律ノ楽ヲスルニ入ル器デソアルラウメ（玉塵抄 第24冊 抄物大系(5) p. 576）
- ・続翠云…只世間ノ人カ差別ヲスルテコソアレ蝶ハ九日ト十日トノ隔ハナイ花香ハ一夜ニハ不_レ可_レ衰ト思フツラウメ也、（三体詩幻雲抄 第3冊 抄物大系 p. 350）

次の例は、ランとラメという文章語的な語形の例であるが、ゾの結びがラメと已然形になり、コソの結びがランと終止連体形になっている。

- ・ソコニテ思フヤウハ。昔_レ漁-人ガ。桃-源へ入_レタルモ。カクゾ。アリツラメト。意ニ自得シ。又幽_クナル。林-中へ入_レテ。葉_ヲヲ。トリタゾ。ソコニテハ。昔_レ广-徳-公ガ。鹿-

門-山ニテ。葉ヲ。トリシモ。カクコソ。アリツラント。思^アタトソ

(三体詩素隠抄 卷10 抄物大系⑤ p. 271)

1-3 ラウメの形態

コソの結びが通常の終止とは違った形(已然形)をとるのが本来の係り結びである、という意味では、ラウよりもラウメがより規範的な形である、と言えるのだろうが、それでは、その語形はなぜラウメという姿をとるのであろうか。

ramu>rau>ra:

という式と、

rame>raume>ra:me

という式をならべてみても、ラウメの姿の由来を終止連体形ラウの由来と平行する単なる音韻変化の式としてはとらえられないことは明らかである。

ラウメに至る一段階前の形とも考えられるラム(ン)メの例が報告されている。

- ・諸人の御ために御たからにてこそ候はんずらむめ (日蓮両人御中書1888)
- ・後世の御ためににてこそ候らんめ (日蓮妙心尼御前御返事)
- ・只アラン物トテハ望中ニ江水ノ渺々タランマデコソアランズランメ也

(三体詩絶句抄 3)

[3例とも橋本1969に報告されたもの]

ラウメの前身として、このラム(ン)メを考えるとしても、ラム(ン)メの姿は、やはり単なる音韻変化としては解釈しきれない。

橋本1969は、

「らめ」となるべきが、「らん」が多く云はれるので二つが混同したのであらう。

(p. 400)

としている。また、村上1979は、

ラウメは、おそらく、ラメあるいはラムメが終止・連体形のラウにひかれて生じたのであらう。

としている。混同(混交)として説明するにしろ、牽引として説明するにしろ、その発生の動機は、単に終止連体形の方が多く言われるから、という量的な問題だけですまされるものではなからう。

ラムがラウとなったのは、推量の助動詞ムがウになると平行して起こった出来事であらうし、そしてそれは、口頭においては、遅くとも中世に入る頃に起こっていた出来事であつたらう。そして、それとともに、

ウ・ラウの文末への集中→形態上の固定化=無変化助動詞化の傾向が生じていたのだらう、と思われる。

つまり、このラウメの形は、無変化助動詞化したラウに、既に形式化したコソ…已然形係り結びの残存規範意識が働いて、

(固定化した) ラウ+ (コソの結びの形態的指標) メ
の形を作り上げたものと解釈できるのである。そして、このラウメを更に文章語化した形がラム (ン) メであったろう。すなわち、ラウメは、時間的前後関係としてはラメの後身であるとしても、その形成の心理としては、一種の「誤った」逆行 (回帰) の結果生まれたものと見ようとするのである。

この固定化=無変化助動詞化したラウに付く再活用語尾とも言えるメは、助動詞ム (ン) にも見られる。〔次に此島1973 p. 275に報告されている例を示す。〕

・花みつ殿とわれと比ぶれば、月光 (つきみつ) をこそ失はんめと思召し候ふ心中御ことわりなり

(花みつ 有朋堂文庫『御伽草紙』 p. 467 ただし、『室町時代物語大成』第10所収の「花みつ」「花みつ月みつ」にはこの本文無し。)

・侍ほどの人、料足なくば、くふまじきにてこそあらんめ。とかくわやくなり。

(醒睡笑 4 角川文庫④ p. 173 ただし、静嘉堂文庫蔵本では「あらめん」とある。)

筆者は、ウ・ラウなどの助動詞の無変化助動詞化を、係り結びの衰退、已然形の消滅等により結果として終止連体形以外の形をとらなくなったものと見るのではなく、言語主体の意識 (無自覚ではあるが) の上に、無変化助動詞化への志向が係り結び及び已然形の全くの消滅以前に既に芽生えていたものと見ようとするものである。

そして、語形縮約 (= すり減り^(註2)) を起こす他の助動詞にも、一方、それに対する反動としての再活用化の動きがあつて、その両者のあつれきから、中世後期に特有な《逆行形 (回帰形) 》が生まれたと考えられる事例が、以下に見るように他にも存在するのである。

第2節 サウの已然形・命令形サウへ

2-1 サウと語形縮約

〈候〉が示す多くの変化形の成立と分布は、とても簡単にとらえきれぬものでなく、それはそれとしての精査が必要である。ここでは、特に、中世後期キリシタン資料や抄物にかなり多く使われているサウに着目したい。

サウは〈候〉が助動詞化による語形縮約 (= すり減り) を起こしたものである。《助動詞化による語形縮約 (= すり減り) 》と言っても、それは助動詞として頻用される語について、なるべく短い語形を造り出そうとする言語主体の無自覚的な心理によって語形が縮約されるもので、鉛筆が使用の結果短くなるような物理的なものではない。

saburau ~ samurau > … > sau > sɔ:

という変化の式を想定し、その出発点から到着点へ至るまでの間をできるだけ自然な音変化として説明し得る中間形を種々想定することは、変化の筋道をたどる一つの方法ではあつても、変化の動因を直接説明するものではない。《助動詞化による語形縮約》は、本来言

語主体の心理に基盤を置くもので、實際上語形の縮約へと至る音の脱落・変化は、いわば質的な変化として「一挙に」起こると考えた方がよろしかろう。

2-2 サウの用法とサウヘ

このサウにはサウヘ（第3音節は発音としても ϕe であったかもしれない、と言われる）という活用形が存在する。

〔已然形の例〕

- ・…辱サニ我カ一騎マテ金陵ヲ発シテ京エゴソ上リサウヘト寄_レ別朱_一（拾遺）ニ也
（三体詩幻雲抄 第2冊 抄物大系 p.225）

〔命令形の例〕

- ・少自備トハチツト用心ヲメサレサウヘト云ソ （史記桃源抄 10 37オ）
- ・トウヲカヘリ（お帰り）サウヘト云テ… （四河入海 1ノ37オ）

サウの使われ方を見るに、未然形・連用形として使われる（ただし語形変化しない）場合もあるが、文末に終止連体形として使われることが一番多いようである。

- ・ケウアル上郎（ママ）ノサフ。チツト御_レ出アツテ。御_レ遊_レサフラヘト云タソ。
（三体詩素隠抄 巻3 抄物大系 p.322）

・アマリ御_レ恩ガ。アツサニ母ノ見_レ参申サセラレテ。サフラフニ。何トテ不_レ令ノ婢ナントシテ。淫_レ佚_レ之詞ヲバ。ウケタマワリサフソ。 （同 巻3 抄物大系⑤ p.350）
上の例のようにサウラウとともに使われる時、文末の終止にはサウ、文中や文末でも命令表現などの時にはサウラウが使われることが多いようである。

史記桃源抄は、サウの多用される資料であるが、ここでもサウは文末終止に用いられることが最も多い。史記桃源抄の中、列伝部の抄文に現れる用例数を下表に示す。

未然形		サウ（サフ）	30	サウラフ（サフラフ）	4
連用形		サウ（サフ）	6		0
終止連体形	文末終止	サウ（サフ）	95	サウラウ	1
	連体法	サウ（サフ）	36	サウラウ	1
已然形		サウヘ	4	サフラヘ	1
命令形		サウ	3	サウラヘ	1
		サウヘ（サフヘ）	9	サラヘ	1

サウラウのすり減った形サウは、それ自体種々の接続形式であることを形態的に示す活用語尾を失っており、いわば無変化助動詞化への道へ一歩踏み込んだものである。しかし、他の助詞・助動詞を伴って一定の表現形式となる場合（例えば、サウズ・サウヌなど^(註3)）は良いが、命令形のように、それ自身の活用語尾の形態によって、単なる終止とは違う命令表現形式であることを示す必要がある場合には、いわばやむを得ぬ再活用語尾として、命令形の指標であるへがサウにくっついて示されたのである。

上の表に見られるように、史記桃源抄の中にサウがその形のままに命令形として使われていると思われる例があるが、それは次のような例である。

・スット無_い露、ヲマイリサウト云ソ。（史記桃源抄 游侠列伝 16 21才）

この抄文だけでは命令形であるか単なる連体終止であるか見分けがつかない。前後の文脈から、これは酒を人に勧めている言葉であることがわかるのである。すなわち、サウだけで命令表現に使われる場合もあったのであろう。そして、これは、サウが、サウラウに比すれば、活用語尾の部分をすり減らした形である以上、当然生じ得る事態であった。しかし、これでは、やはり、命令の意図はプロミネンスやイントネーションの上に表現されたにしても不便であって、特に書記言語では、意味伝達の上で混乱が生じ得るものであった。そのために、これもまた、一種の回帰として命令形の指標である〈へ〉が、すり減ったサウに付いて、サウへの形で使われるようになったものではないだろうか。

〈第11章・注〉

(1) 限られた部分調査であるが、キリシタン資料におけるコソの結びの状況を表に示す。

	結び（述部）に現れる語					
	ラウ	ウ	ウズ	小計	その他の活用語	合計
コソ…已然形	0	0	9	9	54	63
コソ…終止連体形	11	0	0	11	8	19
コソ…流れ	1	1	0	2	28	30

（調査範囲…天草版エソガ物語全巻、天草版平家物語巻1。ただし、「さればこそ」は熟合して感動詞的に使われているので、これを除いた。）

(2) 「すり減り」という語は、小松1981による。

(3) 語形変化を担う活用語尾を失ったサウが、否定のズ・ヌに続く時は、直接的にサウ

ズ・サウヌの形で接続したが、推量の助動詞ウ・ウズ・ラウなどは続きにくく、他の異形（サウラウなどの非縮約形）に任せるか、あるいは唯一（サウ+ウズ）サウズといった形が存在した。この推量表現におけるぎくしゃくした関係が、サウラウの接続にまで及んで一種の誤った回帰形を生んだと思われる例が、次のように国会図書館本玉塵抄に見られる。

・ナニトシテ吾カ一心性ヲ見-得スルコトヲ得サウラウワウソ

（玉塵抄 第17冊 抄物大系(4) p. 246）

・此ハ西王母カタ今マイリサウラウワウソ （玉塵抄 第21冊 抄物大系(5) p. 58）

規範的にはサウラウとあるべきなのだが、サウラウの形を固定したまま、推量表現の語末形式を機械的に接続したものである。背景に音声言語における短縮形サウの無変化助動詞化があるのであろう。

〈第11章・参考文献〉

- 此島1973 此島正年『国語助動詞の研究 体系と歴史』桜楓社 昭和48年10月
小松1981 小松英雄『日本語の世界7 日本語の音韻』中央公論社 昭和56年1月
橋本1969 橋本進吉『助詞・助動詞の研究』岩波書店 昭和44年11月
村上1979 村上昭子「助動詞ラウー中世末期の用法一」『中田祝夫博士功績記念国語学論集』勉誠社 昭和54年2月
湯沢1929 湯沢幸吉郎『室町時代言語の研究』大岡山書店 昭和4年12月（当初の書名は『室町時代の言語研究』。後に風間書房より現行書名で再刊）